

「いままで誰にも語ることがなかった」という井上さんの被爆体験は、広島・長崎での2度の被爆という壮絶な体験でした。

割りばしでウジを

広島市千田町で私は父親と弟の3人暮らしでした。当時、父親は出征し14歳の私と11歳の弟は爆心地から1・8^{キロ}の自宅で被爆しました。

その日、8時に空襲警報が解除になり、洗濯を終えたとき、すごい音がして、家の2階が崩れ落ちてきました。何があるかわからない中、隣のおばさんに声をかけられ着の身着のまま、弟と一緒に救護所になっていた似島に逃げていきました。

〈18〉 広島で被爆し、直後の長崎でも

青森県 井上麻代さん(仮名・85)に聞く

そこには次つぎとけが人が運ばれてきました。みんな顔もやけどで皮がむけ、膿が出て、ウジがわいていました。知らない人でも本当にかわいそう、私は泣きながら木綿の布で押さえ、割りばしでウジを一つずつとって、牛乳瓶に入れました。

長崎では死体をまたいで

「被爆後、3日間は全国どこへでも無料で行ける」と聞き、弟とギューギュー詰め、長崎に向かいました。父親と離婚した母親が長崎に住んでいたからです。

着いたとき、長崎の街は原爆が投下された直後でした。人も馬もゴロゴロと通りに転がって死んでいました。その中をどうやって歩いて行ったらいいのかもわからないまま、死んだ人の体を次つぎとまたいで、歩こうとしない弟の手を引っ張って行きました。

ようやく母に会えまし

たが、母も娘(私にとっでは義妹)を原爆で亡くして、とても私たちを受け入れられる状態ではなく、おじさんのところに行きました。おじさんのところでは家族全員、防空壕の中ギューギュー詰め、数日過ごしました。その間、私は下痢が止まらず、着替えもなく、ずっと洗濯もできず大変でした。

その後、母の実家、おばあちゃんの家に行きました。それがちょうど8月15日でした。戦争が終わり本当にホッとしましたが、いとは2人亡くなりました。

健康の不安は今も

私の体の中には今も5センチくらいの木綿針が入ったままです。8月6日の被爆時、家が崩れ、負傷したときに入ったものだと思います。被爆から10年以上たって痛くて歩けなくなったり、レントゲン写真を撮って初めてわかったのです。

今はそれを証明するこ



広島・長崎二つの体験を語る井上さん



寒さの中、街頭で署名行動

とができなくなっていました。針が体の中で動かずにいてくれることを祈るだけです。

耳は片方聞こえませんが、両耳でないと手当の対象にならないと言われました。夫に先立たれ、独り暮らしとなったいま、体調面が不安です。

【お話を聞いて】

井上さんはこれまで、被爆体験を話すことなく過ごしてきました。私たちとの日々の交流を通じて、徐々に被害者の会や青森原水協の事務局で活動する私たちにも心を開いてくれるようになり、いままで語られることのなかった被爆体験を話してくれました。

これからも青森県原爆被害者の会と連帯し、高齢になった被爆者の相談相手になれたらと思っています。(猪股あや子)

いま伝えたい

被爆者から